

東京大学——学生たちとの青春

岡田吉美（生物化学教室）

学園紛争の傷あとがまだ生なましく残っている東京大学に私が着任したのは、17年前の夏の初めの頃でした。植物ウイルス研究所という農林省の研究所から移ってきた私には、久しぶりに見る若い学生たちの姿がとても新鮮に映りました。恐れることを知らず、ためらうこともなく、そして後ろを振りかえることもなく、たゞ若さゆえに許されるすべての特権を誇示して、あるいは破滅に向うかも知れない道を駆け抜けていく姿。それは自分の若かった頃の姿の一面でもあり、そしてまた私の人生で私自身が切り捨てようとしてきた部分でもありました。学生たちとめぐりあうことのできる東京大学への着任は、私にとって、通り過ぎていった青春をもう一度呼び戻すことのできる春の季節であったような気がします。

こうして何年振りかの学生たちとの研究生活が始まりました。毎年毎年、すばらしい資質に恵まれた学生たちと巡り会い、熱い想いを共に語ることができました。研究所時代の私は、自分一人の世界の中でもものを考えることに慣れていました。しかし東京大学での17年間は、自分一人ではありませんでした。若い学生たちとの輪の中にいることができました。そこには歓びも哀しみも、笑いも涙もありました。

「遇うと遇わざるとは時なり」という中国の言葉がありますが、忘れられない学生との出会いの数々がいま懐しく思い出されます。学生たちの運命のスタートを決め、それが私自身の人生をも決めたいいくつかの出会いを、私はこれからもいく度か思い出すことでしょう。自らの青春と、学生たちとの青春と、私は二つの青春を持つことのでき

た幸運を感謝せずにはおられません。

私は多くの学生の指導教官となりましたが、それは私が多くの学生によって支えられてきたという意味であることをよく知っています。そして私が学生の中であって幸せであったということが、学生たちも私とともに幸せであったということであってくれば、どんなに嬉しいことでしょう。その答えは学生たち自身がこれからの研究生活で出してくれることでしょう。21世紀をたっぴり見ることのできる若い人たちが、その時代の輝かしい担い手となって大きく羽ばたく姿を私は待つことにしましょう。

世は昭和から平成になり、間もなく私も東京大学を去ります。動乱の昭和の歴史が個人の歩みと色濃く重なる私にとっては、この上ない大きな心の区切りのときが一度にやってきたような気がします。日本語の別れの挨拶は「さようなら」と言います。私が昭和と東京大学へさようならをいうときは、私が学生との青春にさようならをいう時でもあり、もう一度私の人生で何ものかを切り捨てるときでもあるのでしょうか。

そのような感懐にふけりながら自分の回りを見回したとき、17年前の学生たちに覚えた新鮮な感動がいまないのはなぜでしょうか。私が年令をとったからなののでしょうか。それとも学生たちがずっと大人になってしまったからなののでしょうか。そんな想いを心の片隅に抱きながら、だからこれだけは言っておきたいと思うのです。「若い学生諸君よ。君たちの生き方はいつまでも後輩に向けての新しいメッセージを送り続けていなければいけないのだ」と。